

最近の中国民俗学の発展

王 汝 瀾

わが国の民俗学研究は、すでに一九一九年の「五四運動」の前後から始められた。熱心な先学たちの努力によって、研究者の隊伍もしだいに整えられ、民俗資料の採集と研究もようやく成果をあげるようになりつつあった。しかし、一九三〇年代の中期以降になると、顧頡剛、楊成志、鍾敬文、楊堃など少数の学者が困難な条件のもとで研究を持続しただけで、民俗学の分野全体は荒れはてた状態に長くおかれることになった。

解放以後、中国共産党の指導のもとに、さまざまな人文科学が活況を呈しはじめた。民間文学や民間芸術などの方面でも、注目すべき達成が見られるようになった。にもかかわらず、民俗学というジャンルは、省みられることがなかった。「四人組」が倒されてから、新しい状況のもとで、多くの学者たちから、民俗学の再建を望む声があがりはじめた。

一九七八年の夏、顧頡剛、白寿彝、容肇祖、楊堃、楊成志、羅致平、鍾敬文の七人の教授が連名で中国社会科学院の指導部に「民俗学とこれに関連する研究機構を設立する建議書」を提出した。この建議書は中国社会科学院の指導部の支持を得て、民俗学が中国社会科学院の今後の研究計画草案のなかに加えられることになった。

また一九七九年十一月に開かれた中国民間文学工作者第二次代表大会では、この建議書が一部修正されて各代表に配布された。雑誌

『民間文学』の同年十二月号に発表された建議書で、七人の民俗学の先学はつぎのように呼びかけている。

「わが国は、三千年以上の文字に記録された歴史をもち、数億の人口を擁する多民族国家であり、世界の国々に伍して、すぐれた社会と政治制度を備えている。このわれわれに、一冊のまともな民俗志と民俗史の著作もないということがあっていいものだろうか。世界のこの分野の科学の書庫に加えるにあたいする何冊かの専門の論著もないということがあっていいものだろうか。われわれは目下のこの荒涼とした状況を、放置しておくことには耐えられない。いまやわれわれが、この科学の空白個所を充填すべき時期は到来したのである。」

民俗学の老大家たちの建議は、全国文連の指導部と賈芝副主席など中国民間文芸研究会の指導部の支持をうけ、大会の各代表の賛同をも得た。まず江蘇、浙江、遼寧などの各省がこれに呼応し、具体化の計画に着手することになった。

建議書を具体化するために、なによりも重要なことは、どのような研究機構を設立するかであった。一九七九年の末に、中国民間文芸研究会の指導部は、会のなかに正式に民俗学部を設け、同会副主席の鍾敬文に民俗学部の主任を兼任させることを決めた。「編者注——王汝瀾はその副主任である。」これは解放後の中国に設けられ

た最初の民俗学研究の機構である。これにつづいて、各地で民俗学研究の組織が作られるはじめた。そのさきがけとなったのは、一九八〇年十一月、浙江省民研会分会での民俗学小組（小組は小グループ）の結成であった。

一九八一年五月には、中国民間文芸研究会が北京で第一回の年会（年次研究集会）を開催した。この年会で、江蘇省と浙江省の代表が民俗学をあつかった論文を発表した。

一九八一年八月、遼寧省の第一回民俗学術討論会が同省の丹東市で舉行された。会に参加した六十余人の代表は、十二の省・市から来ており、漢族のほか、満州族、モンゴル族、回族、朝鮮族など七つの民族がふくまれていた。身分も、専業、学者、民族事務工作者、文化芸術工作者、編集者、大学教授、大学生、新聞記者などにわたっていた。提出された論文四十余編のうち、十八編が討論会で発表された。論文の内容は、民俗学の基礎理論から、満州族、朝鮮族、モンゴル族などの伝統的な習俗や信仰、言語や文学など多方面のテーマをあつかっていた。

会ではまた、鍾敬文教授の「民俗学と民間文学」についての講演と、楊堃氏の「民俗学と民族学」についての講演が行なわれた。期間中に開かれた鍾敬文教授と一部の代表との会合の内容は、「十二省市民俗学工作者座談会紀要」として公表された。この丹東会議は、わが国の民俗学が誕生して以来六十年にしてはじめて開かれた学術討論会であったといえよう。

この会議の終了と同時に遼寧省の民俗学会が正式に成立し、解放後の最初の民俗学会となった。それ以後、現在までに、一九八二年二月に吉林省が成立し、さらに浙江、黒龍江、陝西、甘肅などの各省で民俗学会の設立が予定されている。遼寧大学、復旦大学、牡丹

江師範学院では、教師と学生によって民俗学社が作られた。遼寧大学の中文系では、烏丙安教授が民俗学選修課を新設し、牡丹江師範学院でも「民俗学講座」が開かれた。こうして民俗学研究の態勢づくりが進む一方で、民俗学に関連する出版物も少しずつ増えはじめている。

最近では、大衆による伝統行事も十何年ぶりに復活し、しだいに賑わいを見せるようになった。とくに少数民族地区では、広西省のチワン族の「歌墟」、貴州省ミャオ族の「踩堂」と「游方」、雲南省タイ族の「孔雀の舞い」、チベット自治区チベット族の「歌庄」、内モンゴルの「ナダム大会」、青海省・甘肅省の「花児会」、湖南省の「龍舟競渡」などが、さかんに行なわれている。漢族地区でも、今年（一九八二年）の元宵節（正月十五日）には、北京郊外で「花会」が盛大にくりひろげられた。多くの民間芸人と大衆が「高足」、「小車会」、「競驢」、「竜灯」、「獅子舞」などの伝統行事に参加した。鍾敬文教授と北京師範大学中文系の教師および研究生は、百キロ離れた延慶県の「花会」に行き、実地調査を進めた。

このような民俗行事の盛況と研究活動の進展にともない、雑誌『民間文学』には一九七九年の十月号から「民俗專欄」が作られ、一九八二年に創刊される『民間文学論壇』には民俗のページが予定されている。そのほか、浙江省民間文学研究会分会の『浙江民俗』、吉林省の『民俗報』、江蘇省の『郷土』など、民俗専門の刊行物も出ている。各地で出されている民間文学関係の雑誌にも、民俗関係の記事が多くなつた。

外国、とくに日本やアメリカの民俗学の著作も翻訳されている。北京では、中央民族学院の羅致平教授、北京師範大学の陳秋帆副教授、中国社会科学院の劉魁立副研究員と馬昌儀助理研究員、それに

中国民間文芸研究会の民俗学部と研究部のメンバーが、この仕事にたずさわっている。

一方、日本やアメリカの民俗学者との往来による交流も、ようやく緒につきはじめた。われわれはこれらの国際交流によって、世界各国の研究成果、とりわけ日本のそれに学びたいと考えており、われわれの研究成果を世界の民俗学界に提供できるようにすることも願っている。

(おう じょらん・中国民間文芸研究会民俗学部副主任)

以上三編の文章は、昭和五十七年三月十日の特別例会での三氏の講演を、その草稿をもとにして飯倉照平が要約したものである。

日本口承文藝學會役員

(昭和五十六・五十七年度)

理 会 事 長

○大	牛	岩	井	石	○飯	○飯	○阿	浅	本
島	尾	瀬	上	川	豊	倉	部	野	田
廣	三	隆	純	道	照	正	建	安	
志	千	博	明	郎	男	平	路	二	次
(東	(島	(大	(秋	(静	(東	(千	(千	(宮	(東
京	根	阪	田	岡	京	葉	葉	城	京
都	府	府	府	都	都	都	都	都	都

監 事

○大	○川	○小	○後	○下	○野	○藤	○島	○端	○藤
成	北	宮	宮	三	三	水	真	松	○榎
田	見	地	田	原	谷	沢	鍋	前	谷
俊	武	幸	栄	謙	昌				
守	夫	彦	登	久	一	一	弘	健	明
(千	(東	(東	(東	(大	(東	(新	(大	(京	(千
葉	京	京	京	阪	京	潟	阪	都	葉
都	都	都	都	府	都	府	府	府	都

(○印は運営理事)